

多変数関数の極値を求める 2~3 の方法の比較

— 制約条件のない場合 —

戸田英雄 (ETL), 高山文雄 (ETL)

高沢嘉光 (東大工)

1. まえぶき

多変数関数の極値を求める問題 (あるいは連立の非線型方程式を解く問題) のアプローチは, よく知られているが, 二つの段階に分けられる:

オ1段階は, オ1近似を概測すること

オ2段階は, オ1近似の解の精度を更によくすること

でオ1段の一般的な解法はない。オ2段は一般的な方法が種々あつて, すべてに S.S.P. などを使用できる。

ここでは, 非常に簡単なテスト用の問題と, 筆者が最近試みたある連立型の非線型方程式 (Belaga, Pan [4] による多項式の新しい計算機^式を作るための方程式) を解くことについて, 2~3 の極値を求める方法の比較を述べる。いづれも制約条件のない場合である。

2. 極値を求める種々な方法 (制約条件のない場合)

才2枚の解法で試みた方法を述べる。テスト問の所与な問題として次のものを同いた。

$$F(x_1, x_2) = (6x_1 + 6x_2 - 5)^4 + (6x_1 - 6x_2 - 1)^2 + (2x_1 - 1)^2 \cdot (3x_2 - 1)^2$$

の極値を与える (x_1, x_2) を求めよ。ただし $-1 < x_1, x_2 < 1$ の範囲である。

$F(x_1, x_2)$ の曲図を表す図は高次がカーブプロッタで描いたものである。

(角牛法-1) 座標軸 x_n に平行にある規則で降下していく方法

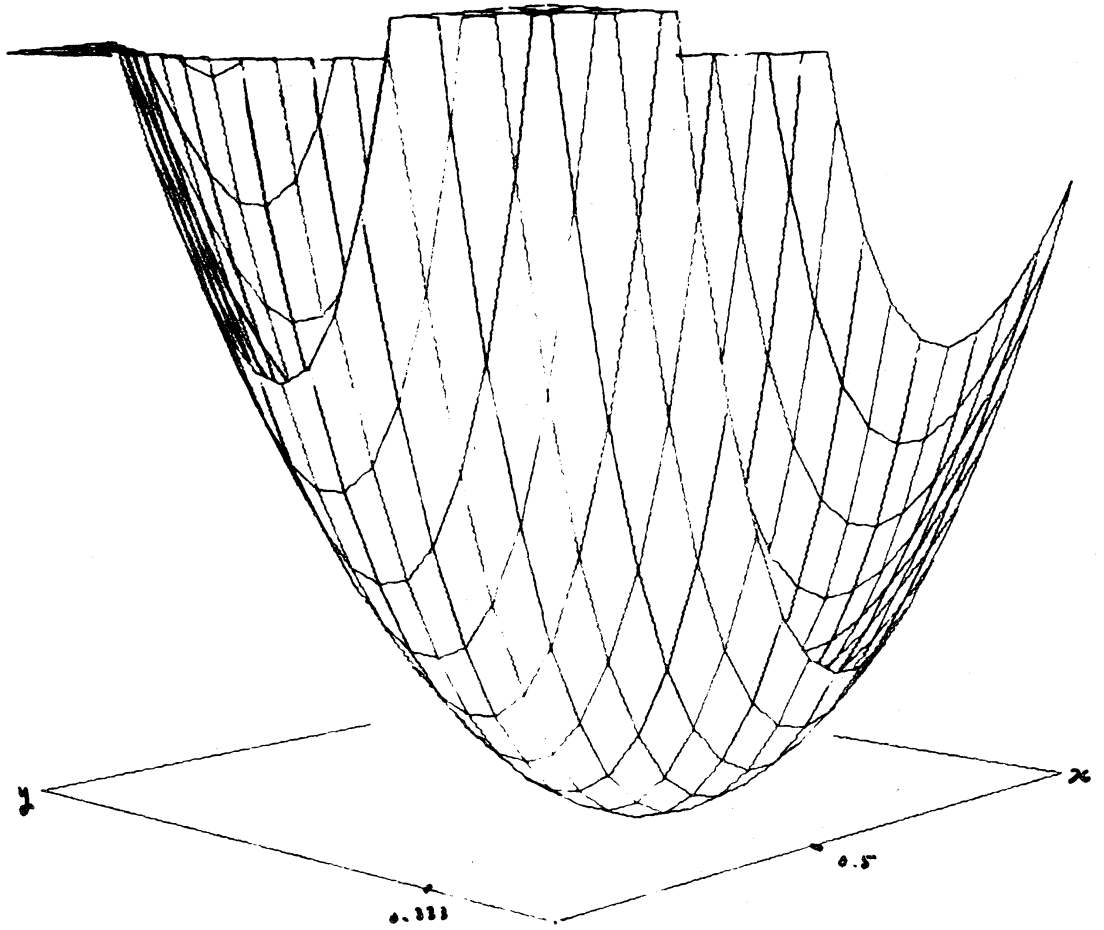
[手順] i) 収束判定用の EPS と列々中点を定める。才1近
似 $(x_1^{(1)}, x_2^{(1)})$ を与えて $F(x_1^{(1)}, x_2^{(1)}) = F_{min}$ とする。

ii) x_1 軸上を列々中点で $x_1 := x_1 + h$ を繰返して
 F_{min} の値を求める。

iii) x_2 軸上で同様に $x_2 := x_2 + h$ を繰返して F_{min} の
値を求める

iv) ii) と iii) を繰返して F_{min} の値が動かなくなつたと
き $h := h/2$ とする

v) $|h| \leq EPS$ ならばやめる。 $|h| > EPS$ のときは ii) に
戻す。



(解法-2) 3^n 型実験計画法

山登り法とは通稱で(4枚率の山に登る話), Box-Wilsonが
 忘答曲面の探検に利用したものである。これはいわゆる最適
 条件を求めるための逐次実験計画法で, 品質管理(1956) PP.431
 ~435に森口氏がこの解説と批判を行い, 最後の一つの案と
 与えている。これによると, 最初から 3^n 型で2次曲面をあて
 ためその中心に向かって進む方法である。

$n=2$ の場合では, ある真のまわりに, 3^2-1 回の観測値
 とおいて, 2次曲面を

$$y = \beta_0 + \beta_1 x_1 + \beta_2 x_2 + \beta_{11}(3x_1^2 - 2) + \beta_{22}(3x_2^2 - 2) + \beta_{12} x_1 x_2$$

をあてはめ, $\beta_0, \beta_1, \dots, \beta_{12}$ を最小二乗法のやり方で推定す
 る。データの構造が直交性のある計画となっているので,
 正規方程式は簡単に与えて, 推定された2次曲面の中心は,

$$\begin{bmatrix} 6\beta_{11} & \beta_{12} \\ \beta_{12} & 6\beta_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -\beta_1 \\ -\beta_2 \end{bmatrix}$$

をいって $\{x_1, x_2\}$ から求められる。はじめ, ある真を
 $\{c_1, c_2\}$ と任意の中心とすれば, 次の中心は

$$c_1 + x_1 \rightarrow c_1, \quad c_2 + x_2 \rightarrow c_2$$

となる。 $n \rightarrow \infty$ として繰返す。

(解法-3) Newton-Raphson 法

関数 $F(X)$ が連続微分可能で、極値 X_{min} の十分近似的に $X^{(n)}$ とする。

$$X_{min} = X^{(n)} + \delta \quad (3-1)$$

$$\left. \frac{\partial}{\partial x_i} F(X) \right|_{X=X_{min}} = 0 \quad (3-2)$$

(3-2) を $X^{(n)}$ のまわりには Taylor 展開し δ^2 のオーダーを省略すると、

$$\left. \frac{\partial}{\partial x_i} F(X) \right|_{X=X^{(n)}} + \sum_{j=1}^2 \left. \frac{\partial^2}{\partial x_i \partial x_j} F(X) \right|_{X=X^{(n)}} \delta_j \doteq 0 \quad (3-3)$$

$$\text{ここで, } g_i \equiv \left. \frac{\partial}{\partial x_i} F(X) \right|_{X=X^{(n)}}, \quad G_{ij} \equiv \left. \frac{\partial^2}{\partial x_i \partial x_j} F(X) \right|_{X=X^{(n)}}$$

$$g \equiv [g_i], \quad G = [G_{ij}]$$

とすると、 G は正の定値をとる。

$$(3-2) \text{ は } g(X_{min}) = 0$$

$$(3-3) \text{ は } g(X^{(n)}) \equiv g^{(n)} = G(X^{(n)} - X_{min})$$

となる。よって Newton-Raphson の反復法は、

$$X^{(n+1)} = X^{(n)} - G^{-1} \cdot g^{(n)} \quad (3-4)$$

となる。ここで $|G| \neq 0$ のとき G^{-1} をどのようにして求めるかは、
 によって、次のような解法に分れる。

(解法 3-1) G から G^{-1} を直接求める法

(解法 3-2) Fletcher, Powell (1963) の方法 (FMFP法) [1]

(解法 3-3) CG法 (FMCG法) [2]

簡単なテスト用の問題ごとの比較表

	内 容	関数値	1階の導関数	2階の導関数	計 算 行 数	
解法 1	座標軸 x_k に平行に降下	要	不要	不要	499 2	332 5
解法 2	3^m 型実験計画法	要	不要	不要	500 001	333 342
解法 3-1	Newton 法 (直接法)	要	要	要	499 996	333 329
3-2	" (FMFP法)	要	要	不要	500 001	333 335
3-3	" (FMCG法)	要	要	不要	500 260	333 593

上記の様な簡単な場合 ($n=2$ で程度は 1 つしかない、程度のある範囲が知られている) にはどうして 2 つも答は得られるか。各解法の特徴を次にあげる。

解法 1	関数値だけが必要。プログラムは一番単純。
解法 2	関数値だけが必要。1 に比べて精度はいいがプログラムは少しめんどう。
解法 3-1	正攻法。2階の導関数も必要。FORMAC 等の数式処理言語と併用すると便利と思われる。
3-2	SSP (IBM 360 用) として用いられている。
3-3	(3-2) より精度で少し劣る場合がある。

3. ある非線型の連立方程式を解く場合、比較表

筆者は最近次のような方程式を解く必要があり、 ϵ 近い精度をよくするために、解法 3-1, 3-2, 3-3 を比較して結果を示す。

問題: Belaga, Pan [4] に与る多項式計算の新しいアルゴリズムを求める問題である;

$$\text{多項式 } p(x) = a_n x^n + a_{n-1} x^{n-1} + \dots + a_1 x + a_0$$

で、 $a_n, a_{n-1}, \dots, a_1, a_0$; x から $p(x)$ を計算するには $2n-1$ 回のかけ算と n 回のたし算が必要となる。

$$p(x) = ((\dots((a_n x + a_{n-1})x + a_{n-2})\dots) + a_1)x + a_0$$

とすれば n 回のかけ算と n 回のたし算で出来る。しかしかけ算の回数は、この位まで減らすことが出来るか? 多くの人がより研究している。その中で Belaga, Pan のアルゴリズムとして次のものがあ

$$p_0 = x^2, \quad p_0' = p_0 + x, \quad p_1 = x + \lambda_1$$

$$p_{\Delta}^{(\Delta)} = (p_0' + \lambda_{\Delta-2}) \cdot (p_0 + \lambda_{\Delta-1}) + \lambda_{\Delta} \quad \left. \vphantom{p_{\Delta}^{(\Delta)}} \right\} (\Delta = 1, 2, \dots, k)$$

$$p_{\Delta+1} = p_{\Delta-3} \cdot p_{\Delta}^{(\Delta)} + \lambda_{\Delta+1}$$

(3-1)

$$p_{4k+3} = p_{4k+1} \cdot (p_0 + \lambda_{4k+2}) + \lambda_{4k+3}$$

$$p(x) = \begin{cases} a_n p_n & (n = 4k+1, 4k+3) \\ a_n x p_{n-1} + a_0 & (n = 4k+2, 4k+4) \end{cases}$$

かけ算の回数は $\left[\frac{n+4}{2} \right]$ になるが、たし算の回数は $n+1$

となる。たとえ $n=9$ の場合

$$p(x) = a_9 x^9 + a_8 x^8 + \dots + a_1 x + a_0 = a_9 \{ x^9 + b_8 x^8 + \dots + b_1 x + b_0 \} \\ = a_9 p_9$$

で、Belaga-Pan の定理より $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_9$ は、 b_8, b_7, \dots, b_0 から

かき $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_9$ を求めるには、かけ算は 6回、

たし算は 10回となる。

$\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_9$ を求めるには、次の連立方程式を解く必要がある。未知数は、 $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \alpha_4, \alpha_5, \beta_2, \beta_3, \beta_4, \lambda_9$ である。

$$b_8 = 1 + \alpha_1$$

$$b_7 = \alpha_2 + \alpha_1 + \beta_2$$

$$b_6 = \alpha_3 + \alpha_2 + \beta_2 \cdot \alpha_1 + \beta_3$$

$$b_5 = \alpha_4 + \alpha_3 + \beta_2 \cdot \alpha_2 + \beta_3 \cdot \alpha_1 + \beta_4$$

$$b_4 = \alpha_5 + \alpha_4 + \beta_2 \cdot \alpha_3 + \beta_3 \cdot \alpha_2 + \beta_4 \cdot \alpha_1$$

$$b_3 = \alpha_5 + \beta_2 \cdot \alpha_4 + \beta_3 \cdot \alpha_3 + \beta_4 \cdot \alpha_2$$

$$b_2 = \beta_2 \cdot \alpha_5 + \beta_3 \cdot \alpha_4 + \beta_4 \cdot \alpha_3$$

$$b_1 = \beta_3 \cdot \alpha_5 + \beta_4 \cdot \alpha_4$$

$$b_0 = \beta_4 \cdot \alpha_5 + \lambda_9$$

(3-2)

を解けば、 $\beta_2, \beta_3, \beta_4$ から $\lambda_6, \lambda_7, \lambda_8$ が求まり、

$\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \alpha_4, \alpha_5$ から $\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3, \lambda_4, \lambda_5$ は $(\lambda_2 + \lambda_3), \lambda_3, (\lambda_2 \cdot \lambda_3 + \lambda_4)$

が求められる。

数値例として, $b_8 = 9$, $b_7 = 9 \cdot 8 = 9^{(2)}$, $b_6 = 9 \cdot 8 \cdot 7 = 9^{(3)}$, \dots , $b_1 = 9^{(8)}$,
 $b_0 = 9!$ により $f(x) = e^x \approx \frac{1}{9!} (x^9 + b_8 x^8 + \dots + b_0)$ の場合)
 λ_9 の近似値として高さが 16770 と求めた。

(3-2) 式を $\{b_8 - (1 + \alpha_1)\}^2 + \{b_7 - (\alpha_2 + \alpha_1 + \beta_2)\}^2 + \dots + \{b_0 - (b_9 \cdot \alpha_9 + \lambda_9)\}^2$
 の極値を与える真を求めた問題として, 解法の (3-1), (3-2),
 (3-3) と比較した。

(3-2) 式を解く	判定
解法 3-1 Newton-Raphson 法	収束した
3-2 FMFP 法	IER=1 (LIMIT=30 で収束しない)
3-3 FMCG 法	IER=2 (10000 で収束しない)

よい方が近似から出発しないと, どの方法でもうまいかな
 い。(3-2) 式のような問題では偏微分係数が簡単に求まる
 ので, 解法 (3-1) が一番よいのは当然ではある。

数値例の OUTPUT (解法 3-1) を次にのせる:

10 - 1

88.B7,.,.B0 = .90000000D+01 .72000000D+02 .50400000D+03 .30240000D+04 .15120000D+05 .60480000D+06
 .18144000D+06 .36288000D+06

K = 1
 A1,A2,.,.A5 = .80000000D+01 .52273201D+02 .20479225D+03 .56742886D+03 .83637884D+03 }
 BETA2,BETA3,BETA4 = .11726819D+02 .15312002D+03 .43819955D+03 C = .16769750D+05 (=A) }
 F1,F2,.,.F9 = .00000000D+00 .00000000D+00 -.2775576D-16 -.22204480D-15 :00000000D+00 }
 -.70321924D-01 -.13462089D+01 -.41645394D+01 }
 DA1,.,.DC = .00000000D+00 -.20092879D-04 .14875333D+05 .76240911D-03 .91438105D-02 .20092879D-04 }

(3-2) 式で $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \alpha_4, \alpha_5, \alpha_6, \alpha_7, \alpha_8, \alpha_9$
 の値を代入

K = 2
 A1,A2,.,.A5 = .80000000D+01 .52273181D+02 .20479225D+03 .56742982D+03 .83637884D+03 }
 BETA2,BETA3,BETA4 = .11726819D+02 .15312002D+03 .43819955D+03 C = .16769750D+05 }
 F1,F2,.,.F9 = .00000000D+00 -.2775576D-16 -.13877788D-15 -.40372461D-09 .28858351D-08 }
 .74701651D-07 -.16362755D-05 -.40368929D-05 }
 DA1,.,.DC = .00000000D+00 -.18346762D-09 -.35748221D+09 -.35620253D-08 .94455296D-09 }
 .42986159D-08 -.34671271D+05 }

* 2進化

K = 3
 A1,A2,.,.A5 = .80000000D+01 .52273181D+02 .20479225D+03 .56742982D+03 .83637884D+03 }
 BETA2,BETA3,BETA4 = .11726819D+02 .15312002D+03 .43819955D+03 C = .16769750D+05 }
 F1,F2,.,.F9 = .00000000D+00 -.13877788D-16 -.19428903D-15 -.17763588D-14 -.11102230D-13 }
 -.14610535D-12 -.40945085D-12 -.15676349D-12 }
 DA1,.,.DC = .00000000D+00 -.10148086D-16 -.12375971D+16 .50206969D-15 .24025874D-16 }
 .24606096D-16 .80537641D-15 -.72460275D+12 }

* 3進化

K = 4
 A1,A2,.,.A5 = .80000000D+01 .52273181D+02 .20479225D+03 .56742982D+03 .83637884D+03 }
 BETA2,BETA3,BETA4 = .11726819D+02 .15312002D+03 .43819955D+03 C = .16769750D+05 }
 F1,F2,.,.F9 = .00000000D+00 -.20816682D-16 -.16653343D-15 -.77715682D-15 -.75495166D-14 }
 -.18030022D-12 -.11413093D-12 -.14033219D-12 }
 DA1,.,.DC = .00000000D+00 .64469083D-16 .23849582D+15 .14075174D-14 -.34711236D-15 }
 .21278777D-15 -.10453266D-14 .11582633D+11 }

* 4進化

K = 5
 A1,A2,.,.A5 = .80000000D+01 .52273181D+02 .20479225D+03 .56742982D+03 .83637884D+03 }
 BETA2,BETA3,BETA4 = .11726819D+02 .15312002D+03 .43819955D+03 C = .16769750D+05 }
 F1,F2,.,.F9 = .00000000D+00 -.13877788D-16 -.16653343D-15 -.16653343D-14 -.84376950D-14 }
 -.5573196D-13 -.20294877D-12 -.10169643D-12 }
 DA1,.,.DC = .00000000D+00 -.15444973D-16 -.83285891D+16 -.38940676D-15 .31003027D-15 }
 .35752111D-16 .50539576D-15 -.44930260D+12 }

* 5進化

A1,A2,.,.A5 = .80000000D+01 .52273181D+02 .20479225D+03 .56742982D+03 .83637884D+03 }
 BETA2,BETA3,BETA4 = .11726819D+02 .15312002D+03 .43819955D+03 C = .16769750D+05 }
 F1,F2,.,.F9 = .00000000D+00 -.13877788D-16 -.16653343D-15 -.16653343D-14 -.84376950D-14 }
 -.5573196D-13 -.20294877D-12 -.10169643D-12 }
 DA1,.,.DC = .00000000D+00 -.15444973D-16 -.83285891D+16 -.38940676D-15 .31003027D-15 }
 .35752111D-16 .50539576D-15 -.44930260D+12 }

A1,A2,.,.A5 = .80000000D+01 .52273181D+02 .20479225D+03 .56742982D+03 .83637884D+03 }
 BETA2,BETA3,BETA4 = .11726819D+02 .15312002D+03 .43819955D+03 C = .16769750D+05 }
 F1,F2,.,.F9 = .00000000D+00 -.13877788D-16 -.16653343D-15 -.16653343D-14 -.84376950D-14 }
 -.5573196D-13 -.20294877D-12 -.10169643D-12 }
 DA1,.,.DC = .00000000D+00 -.15444973D-16 -.83285891D+16 -.38940676D-15 .31003027D-15 }
 .35752111D-16 .50539576D-15 -.44930260D+12 }

4. むすび

多変数関数の極値を与える変を求める問題(制約条件のない場合)を連立型の非線型の方程式を解く問題として考えた。解のより近似を採るのが一番大変な仕事であった。

計算機で問題を解くときの心構えとしてよく知られているが、なかなか実行が難しい。とど、

1) その問題に内在する理論のうらみから、利用できるものは出来るだけ利用して、問題や解の性質を把握する。(各分野での理論の活用)

2) 問題や解の性質を出来るだけ活用した解法を選択することが大切である。

計算セクタにあるライブラリ(SSP等)を機械的に利用してもうまく行かないことが多いのは当然で、とくに多変数関数の極値探しでは(1)、(2)の必要性は大まかと思われる。

最後に、Belaga, Pan による多項式の新しい計算法等について種く教えを頂いた伊理正夫氏に御礼申し上げます。

文献

- [1] R. Fletcher and M.J.D. Powell, "A Rapidly Convergent Descent Method for Minimization", *Computer Journal*, Vol. 6, (1963), PP. 163-168.
- [2] R. Fletcher and C.M. Reeves, "Function minimization by conjugate gradients", *Computer Journal*, Vol. 7, (1964), PP. 149-154.
- [3] IBM data center user's guide SSP PP. 1-9.
- [4] V. Ya. Pan, "Methods of computing values of polynomials. Russian Math. Surveys, Vol. 21, PP. 105-136 (1966).
- [5] L.A. Lyusternik, O.A. Chervonenkis and A.R. Yanpal'skii, *Handbook for Computing Elementary Functions*. Pergamon Press, 1965.
- [6] 伊理正夫, 講義プリント (1970)